街なかをわくわくする広場に！

～空き店舗等を活用した協働のまちづくりを目指して～

富山県小矢部市　高山典子

１．はじめに

郊外型ショッピングセンターの立地、コンビニエンスストアやインターネット通販の普及などにより、人々の購買機会は多様化しており、商店街の活性化はどこの地域においても課題となっている。小矢部市の駅前商店街通り（以下「街なか」）も例外ではない。世の中には「商店街不要論」という考え方もあるという。しかしながら、街なかは駅前という市の玄関口に立地し、市の顔でもある。街なかが元気であればこそ、市全体の魅力も高まるのではないだろうか。

平成 27 年 9 月に公表された市民満足度調査結果報告書によれば、第 6 次小矢部市総合計画に掲げた各種政策のうち、「魅力ある市街地等の形成」は満足度の低い政策の 1 位という結果になった。魅力のない街には「人がこない、住まない、出ていく」といった悪循環が起こり、街なかに訪れる人が少なくなることで、人との関わりも薄くなり、本来「街なか」が持っているはずの地域コミュニティの担い手としての機能も果たせなくなると思われる。街なかに地域住民が集い、会話を楽しみ、活発にコミュニケーションを図る空間があってこそ、街に居心地の良さを感じ、自らの街に誇りと愛着を持つことができる。

本レポートでは、街なかの魅力を高め、愛着のある場所とするため、街なかの課題について整理し、行政だけでなく市民と行政が協力して、より良いまちづくりを進めていくための方策について検討し、提案するものである。

２．小矢部市の概要

小矢部市は、富山県の西の玄関口、石川県境に位置する人口 31,163 人（平成 27 年 11 月末現在）、面積 134.07 平方キロメートルの市である。北・西・南の三方が山や丘陵で囲まれ、平地の東側が散居村で有名な砺波平野の一部を成しており、市域の約３割を占める田畑は豊かな水稲単作の穀倉地帯となっている。

図１ 小矢部市の位置
小矢部市観光協会ホームページより引用

北陸自動車道（東西）、東海北陸自動車道および能越自動車道（南北）の結節する交通の要衝に位置することから、北陸の高速交通網の中心都市として大きな役割を担っている。このような広域的な集客についての地理的優位性を活かし、市がアウトレットモール誘致を推進し、平成 27 年 7 月には北陸エリア初となるアウトレットモールがオープンしたところである。

３．街なかの現状分析・課題抽出

アウトレットモールという大規模商業施設のオープンにより、周辺市町村はもとより、県内外から多くの人が小矢部市を訪れるようになった。その数は年間で推定 300 万人～350 万人と見込まれている。一方、アウトレットモールから約 3 キロメートル離れた街なかに新しい人の流れが生まれたかといえば、アウトレットモールの従業員が飲食店を利用するといった変化が出てきているものの、まだ大きな変化となっていない。

まずは街なかの歴史について振り返るとともに、現在の街なかの現状や課題を整理する。

（１）城下町・宿場町であった歴史

街なかは、旧北陸街道沿いに商店が軒を連ねており、今石動（いまいするぎ）と言われていたこの町の歴史は古い。江戸時代初期には城下町として繁栄し、その後、宿場町・今石動宿として発展してきた。金沢と富山のほぼ中間にあって、金沢に行くにも、富山に行くにも徒歩で 1 日の距離であるばかりでなく、その間に倶利伽羅（くりから）峠があるため、この峠下の今石動で 1 泊することになる。参勤交代やお国替えの際には千数百人が宿泊するなど、北陸街道の重要な宿場町として大いに栄えたという。また、加賀藩にとっては軍事上および政治上からも重要な地点であり、年貢米の集散地としても大切な場所で、物資の交流が盛んであった。

現在も、曳山や獅子舞などの伝統文化は脈々と受け継がれているが、城下町・宿場町であった面影を残す場所は少なく、献上菓子を納めていたという由緒ある和菓子屋や呉服屋の建物が名残といえる。また、今石動の町立ての際に当時の領主前田利秀が寺院集中策を行ったことによる 29 の寺院が残り、街なかの表通りから路地に入ると、寺の築地塀が連なる風景が、いにしえの雰囲気を漂わせている。

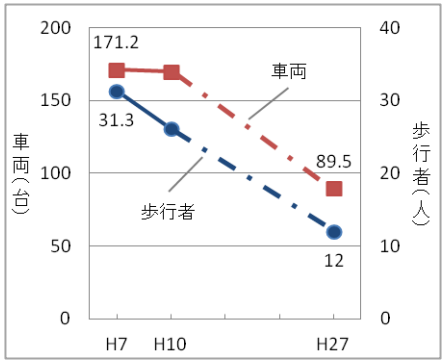

図 2 1 時間あたり通行量の推移

商店街等通行量実態調査報告書（1999）、駅前商店街観光客受入態勢整備のための調査・検討報告書（2015）をもとに筆者作成

（２）街なかの現状

歴史のある場所に位置する街なかであるが、道路の拡幅や歩道の整備により近代的な街並みとなっている。現在 90 店舗が街なかで営業を行っており、16 店舗の空き店舗がある。1 時間あたりの歩行者や車両の通行量は 20 年前に比べ半減しており（図 2）、通行量という観点から判断すると賑わいは確実になくなってきている。

平成 22 年国勢調査結果からは、街なかを構成する石動町、中央町に居住する自営業主数が平成 7 年に比べ、通行量同様に半減していることがわかる（図 3）。

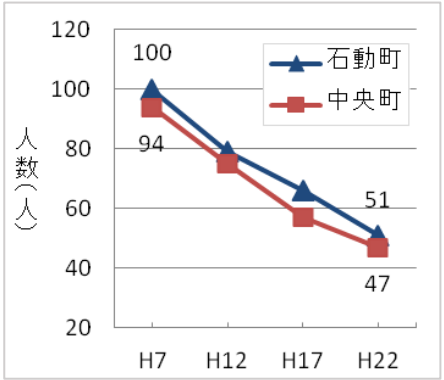

図 3 自営業主数の推移

国勢調査結果をもとに筆者作成

平成 25 年度に小矢部市商工会（以下「商工会」）が取りまとめた小矢部市商店街活性化

策研究事業報告書の中にある商業者アンケート調査結果によれば、60 歳以上の経営者が全体の 6 割以上を占め（図 4）、事業の後継者の状況については「自分一代限り」または「後継者がいない」と回答した者が 3 割あった（図 5）。このことから、今後、さらに空き店舗が増えていく可能性があり、空き店舗となった物件を次の事業者にどう繋げていくかは、街なかの存続を考えるうえでも重要な課題である。

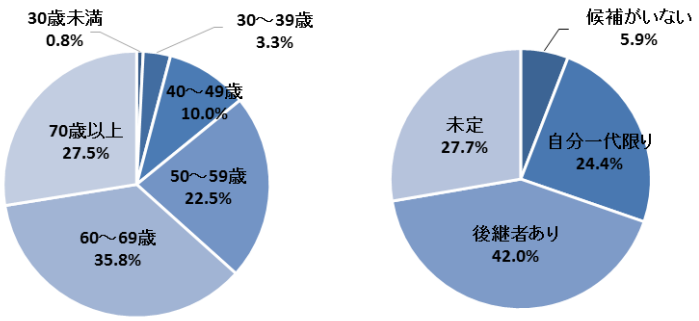

図 4 経営者の年齢　　図 5 後継者の状況

小矢部市商店街活性化策研究事業報告書（2013）

また、以前は「越前町商店街協同組合」と「石動銀座商栄会」の 2 つの商店街組織があったが、構成する組合員の減少に伴い、「石動銀座商栄会」が平成 23 年に解散したため、商店街組織に加盟していない店舗も存在する。現在、街なかの賑わい創出施策を担っているのは、市や商工会が中心という状況である。街なかで行ったヒアリング調査の中にも、若い経営者からの「街なかの現状に危機感を持っているが誰に話をすればよいかわからない」といった声があるように、街なかを盛り上げたいという思いを持った人はいても、街なか全体の一体感が不足している。まちづくりの担い手を育てていくことも課題の一つである。

（3）石動駅周辺開発計画による街なかの未来

市では街なかへの誘客を目的として、石動駅の改築に併せた市立図書館の移設整備を計画しているところである。駅に市立図書館ができることにより、駅周辺に集まる人は増えることになるだろうが、来訪者の街なかへの回遊性を高めていかなければ、街なかは取り残されたままになってしまう恐れがある。

4．街なかの魅力を高めるための方策の検討

（1）これまでの取り組みの振り返り

① 近代的な商店街の整備

街なかを通る県道（旧北陸街道）沿いに帯状に発展してきた商店街は、道路の幅員が 5～6 メートルと狭いうえに老朽化した木造店舗が密集し、防災、交通、衛生環境の面での土地利用状況は劣悪であった。昭和 50 年代から平成 10 年にかけて、街路事業、市街地再開発

写真 1 整備された街並み

事業等により、歩道両側それぞれ 3.5 メートルを含む総幅員 16 メートルの都市計画道路を整備し、街路樹や街路灯が整えられた商店街となった。

このように街路拡幅など都市基盤整備に力を入れてきたが、快適性・文化性の高い空間の創造による都市魅力の向上に対する施策は不足している。

②イベント開催

都市基盤整備により拡幅された道路は、年に数回、イベントの会場としても利用されている。夏に開催される「火牛の計レース」は、倶利伽羅源平合戦で木曾義仲の軍が牛の角に松明をつけて夜襲をしかけたという「火牛の計」をモチーフにしたイベントである。

写真 2 火牛の計レース

このレースはわら製の巨大な牛を引いて競うのだが、道路が拡幅されたからこそ実行できるイベントであり、今では小矢部市を代表するイベントの一つになっている。

また、平成 27 年度は、この道路を歩行者天国にして「おやべまちなか芸術祭」を新たに開催し、街なかが多くの人で賑わった。しかしながら、イベント開催は賑わい創出には効果的であるが、一時的な賑わいに留まり、恒常的なものに繋がらないのが現状である。

③交流サロンの整備

平成 16 年度に地域住民が気軽に立ち寄れる交流の場・生きがいづくりの拠点として「街かどサロンふれあい」（以下「サロン」）を商工会が整備した。毎日 20 人以上の高齢者がサロンを訪れ、世間話をするなどして交流を楽しんでいる。サロンや街なかでのヒアリング調査によれば、緩やかな繋がりのある交流スペースの需要は高い。しかしながら、サロンの利用者は 60 歳以上の女性が大半を占め、男性や若年層の利用は少ない。交流スペースを新たに作ったとしても、ターゲットやコンセプトを変えていかないことには街なか全体の魅力を高める核には成り得ないと思われる。

④空き店舗等出店助成金の交付による商業集積

市では、都市計画の用途区域内への商業集積を目的として、平成 23 年度から空き店舗や空き家等を利用して新規出店した者に対し、改装費の一部助成を行っている。平成 27 年度はアウトレットモールの来店客を見込んで、市内の空き店舗等を利用した飲食店等の出店が相次いだ。しかしながら、その出店地域を見ると街なかへの出店は 11 件中 1 件に留まり、足取りは鈍い。

（2）先進事例の取り組みから学ぶこと

街なかが立ち寄りたくなる「場」となり、その「場」で生まれる交流を「まちづくり」に繋げていくため、次の二つの先進事例から「街なかの魅力を高める」方策について学ぶことにする。いずれもまちづくりのきっかけは行政であったが、民間が主導して取り組むことにより、街の魅力を高めた事例である。

①「まちなか広場」による中心市街地の魅力の向上～富山グランドプラザ～

コンパクトシティを目指している富山市は、都市地区（中心市街地）の再開発事業で、

二つの再開発ビルの間の市道を拡幅して作る南北約 65 メートル、東西約 21 メートルのガラス屋根に覆われた広場空間「グランドプラザ」を平成 19 年に整備した。屋外空間でありながら、屋内的安心感を包括した独特な空間となっている。誰でも気軽にイベントを開催できる仕組みも手伝って、グランドプラザは開業以来、年間 100 件以上の大小さまざまなイベントが開催され、休日のイベント実施率は自主事業も含め、ほぼ 100%を維持している。大きなイベントが実施されていない平日には、まちなかの遊び場（つみ木広場、チョーク広場）として市民に開放しており、常に「ハレ」の場として華やいだ雰囲気を作り続けることで、街を訪れる買い物客などが好奇心や刺激を求め、立ち寄りたくなる場所となっている。また、広場に設置されているテーブルと椅子に人が佇ずみ、くつろぐ様子は、さらに人を呼び寄せ、大勢の人がいることが当然であるといった賑わいの光景を生んでいる。グランドプラザを楽しく活用したい人々が集まり、イベントを企画する任意団体が誕生するなど、市民の様々な活動や交流の拠点となり、郊外施設に流出していた若者、男性やファミリー層が中心市街地に戻ってきているという。

②リノベーションまちづくりの推進によるエリア価値の向上～北九州市小倉魚町～

平成 22 年北九州市は、市内の遊休化したストックを活用しながら都市型産業をつくり、育てることで質の高い雇用を創出することをテーマにした「小倉家守[1]構想」を策定した。

この「小倉家守構想」では「リノベーションスクール」を、都市型ビジネス集積を実現するエンジンとして位置づけている。リノベーションスクールとは、実在する遊休不動産を題材に、事業計画を立案し、物件の所有者である不動産オーナーに事業提案を行う実践的なカリキュラムである。つまり、全国的に有名なリノベーションの専門家らを講師として招き、全国から集まった受講生がチームを組み、現地視察やディスカッション等を通じて 4 日間で遊休物件のリノベーション事業計画を立案し、最終日にその事業計画を不動産オーナーに事業提案を行うものである。提案された事業計画の中からプロジェクトが生まれ、物件が再生されていく。

平成 23 年度に国土交通省モデル事業の補助を受けて始まったスクールであるが、補助終了後も地元有志から構成される「株式会社北九州家守舎」や地域主体で立ち上げられた「北九州リノベーションまちづくり推進協議会」を中心としてスクールが継続して開催されている。平成 27 年 4 月までに 15 件の物件が再生され、385 人の雇用を生み、エリアの通行量も 4 年で 4 割増加するという大きな効果を上げている事例である。

５．小矢部版リノベーションによるまちづくりへの提案

（１）目指すべき「街なかの姿」

第 6 次小矢部市総合計画において、六つのまちづくり目標が掲げられており、その中の

[1]家守（やもり）：江戸時代における長屋の大家の呼称であり、単なる借家管理や家賃徴収のみならず、借家人の生活面の面倒や地区マネージャーのような雑事に至るまで全般的な仕事をこなしていた。現代版家守は、行政・地域住民等と連携し、空き家等をスモールオフィスなどに転用し、その地域に起業家や個人事業者を入れ、地域を支える新しい産業や賑わいを興そうと試みる者をいう。（北九州市ホームページより引用）

一つに「人がゆきかう都市空間と交流にあふれるまち」がある。また、平成 27 年 10 月に策定された総合戦略では、「若者や女性が輝く環境づくり」が基本的視点の一つとしてあげられている。本レポートではこれらを考慮したうえで、目指すべき「街なかの姿」へと近づくための方策の一つとしてリノベーションによるまちづくりを検討する。

寺や路地など今ある風景を活かしながら、今後増える可能性のある「空き店舗や空き家」（以下「空き店舗等」）といったマイナスイメージの強い資源を価値のある資源へと転換していくことにより、街なかに不足している機能を補完し、街の魅力を高めていく。最初は個々の点であったものが線や面となって広がり、最終的には街なか全体が広場のような空間、つまり「街歩きが楽しい街なか」を目指していく。

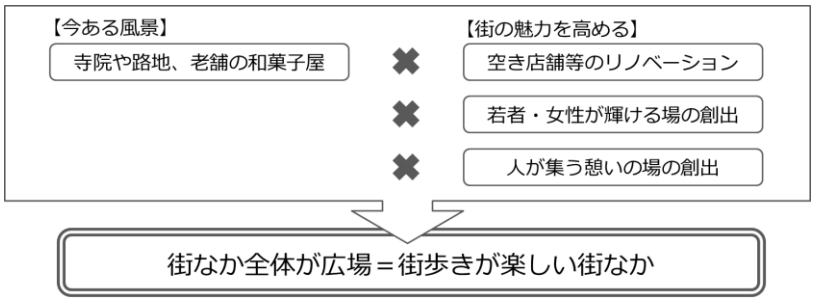

図 6 目指すべき「街なか」の姿

（2）テーマ設定型リノベーションまちづくり

①リノベーションスクールの概要

北九州市でのリノベーションスクールでは、どのような事業（ビジネス）を行えばよいかも含めた事業提案であったが、小矢部版では、店や場といった街なかに増やしたい機能（例えばカフェを作る）をテーマ設定したうえで、実際に街なかにある空き店舗等を題材にリノベーション事業計画を立案し、不動産オーナー等に事業提案を行っていく。テーマ設定することで、特定の業種が偏ることなく、街なかの機能向上を図っていくことができると考える。

テーマに関しては、行政から提案したものや後述の「まちづくりワークショップ」で集約された地域の課題、あるいはリノベーションスクールに参加する受講生の「よそ者」の視点から見た“多様なアイディア”もテーマとして設定することとする。

スクールの開催には、題材として提供を受ける空き店舗等の調整や講師の依頼など、行政や専門家のサポートが不可欠であるため、初期段階では行政が主導して行っていくが、ボランティアスタッフとして「小矢部市まちづくり研究会」（以下「まち研」）の OB を取り入れていくことにより、徐々に市民主体の取り組みへと移行していきたい。

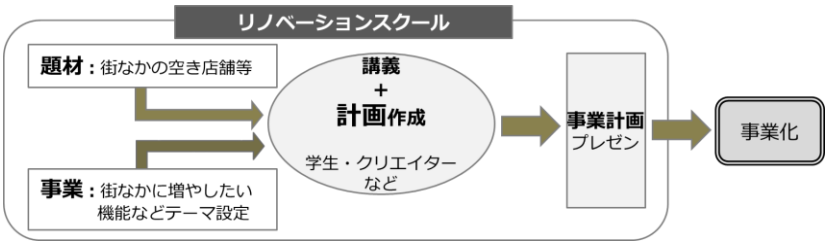

図 7 リノベーションスクールのフロー図

まち研は、新しいまちづくりの方策等について次世代を担う市民と市職員が協働して研究することを目的として平成 17 年度に設置された。委嘱された 2 年の間に、自ら設定した研究テーマに取り組み、市の特産品を活かした新グルメコンテストを開催して商品化に繋げたり、市内に点在する七福神像に注目して「七福神めぐり」といった観光コースの提案も行ったりしている。まち研 OB は現在 53 名おり、まち研を通じてまちづくり活動の楽しさを知った彼らの力に期待したい。

②出店希望者とのマッチング

実現可能と判断された事業計画の概要は、ホームページ等に掲載し、事業に賛同する出店者を募ることとする。事業計画と出店者のマッチングは、後述の「まちなか体験ツアー」と連携して行う。

リノベーション費用については、出店者が費用を負担するが、「空き店舗等出店助成金」を活用することにより、出店者の負担を軽減する。

③まちなか体験ツアーの開催

リノベーションスクールの開催と並行して、将来的に創業を希望する人の発掘を行っていく。伝統行事である曳山祭や天神獅子舞祭などの時期にあわせて、市観光ボランティア等の協力のもと「まちなか体験ツアー」を実施する。祭への参加などから街なかの歴史資源について理解を深めてもらうとともに、リノベーション事業計画を紹介しながら空き店舗等をめぐることにより、ツアー参加者が街なかでの出店に対するイメージを膨らませることを狙いとする。

行政は、創業セミナーをまちなか体験ツアーと合同開催することにより新規創業者の発掘を支援する。また創業に向けて商工会や金融機関等と連携して、事業計画が早期に実現可能になるよう支援していく。

（3）リノベーションまちづくりを推進していくうえでの課題

①空き店舗情報の収集

現在、空き家については市で「空き家・空き地バンク」を設置し、登録のあった空き家・空き地の情報を提供しているところであるが、空き店舗に関する情報を全く持ち合わせていない。現存する空き店舗について、その所有者や賃貸の意思等について不動産業者の協力を得ながら調査し、空き家情報とともに情報を蓄積していく必要がある。

②不動産オーナーの理解

リノベーションスクールを開催するためには、まず、実在する空き店舗等を題材として提供してもらうこと、そして、提案された事業計画を実事業化させるため、空き店舗等を賃貸することについて、所有者である不動産オーナーに理解を得る必要がある。前述の商業者アンケート調査で、廃業時の店舗の活用（図 8）の問いに対し、「空き店舗のままにしておく」、「住宅としてそのまま利用する」と答えた者が全体の 8 割にのぼること

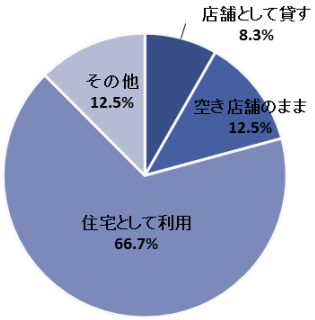

図 8 廃業時の店舗の活用
小矢部市商店街活性化策研究事業報告書（2013）

からも、空き店舗等をうまく活用していくことが不動産オーナーにとっての利益になり、街なかの活性化にも必要であることを粘り強く伝えていく必要がある。

③まちづくりの担い手の育成

これまで街なかの賑わいづくりに関しては､市や商工会が主体となって行ってきており、街なかの経営者たちは、イベント等に参加する形で関わってきた。

北九州市の事例でわかるとおり、リノベーションまちづくりは、新しい発想や柔軟さのある民間が主導して行うことにより初めて、まちづくりという活動に広がりが生まれ、街の魅力も高まっている。街の主役である地域住民が主体となり、市民や事業者、行政などが協働して取り組んでいくことが必要である。

小矢部市民の「協働」に関する意識を計る指標として、平成 21 年度から実施されている「おやべ型 1%まちづくり事業[2]」の採択事業数（図 9）を参照する。制度発足時の採択事業数は 57 件であったが、平成 27 年度には 76 件と増加している。また、76 件中 34 件が「地域の活性化」に資する事業であるという点からも､「まちづくりは行政が担うもの」という従来の考えから､「協働」という意識へと少しずつ変化しているように思われる。この「協働」の意識をさらに育てていき、市民主体のまちづくり活動へ繋げていきたい。

具体的にリノベーションまちづくりに市民をどのように関わりを持たせていくかについては、この後で述べていく。

おやべ型１%まちづくり事業	平成21年度	・・・	平成27年度
採択事業数	５７件	増加	７６件
「地域の活性化」に関する事業	１９件		３４件

図 9「おやべ型 1%まちづくり事業」採択事業数

小矢部市市民協働課ホームページをもとに筆者作成

（4）具体的な施策

小矢部版リノベーションスクールで事業計画を作成するにあたり、テーマを設定することになるのだが、そのテーマについて次の二つを提案したい。

①社寺広場を活用した魅力の向上～人々が集う憩いの場～

まずは、人が立ち寄りたくなる空間の創造を提案したい。人が集まる魅力的な空間があってこそ、空き店舗等のリノベーションも進むと考える。

遊休不動産ではないが、寺院の境内の活用を検討したい。先に述べたが、街なかには多くの寺院が残っており、社寺空間も多いというのが街なかの特徴である。街なかの中央に位置する場所にも広い境内を有した寺院があるため、ここを人が集う場所として活用すれば、街なかへの回遊性が高まるのではないだろうか。

寺院の境内を利用するのは敷居が高いように思うが、寺院が多いという特徴がある街なかだからこそ、市はこれまでもイベントの会場として、積極的に寺院を利用してきたという実績がある。平成 27 年度も市民劇団の公演や演芸亭、まちなか芸術祭の会場として本堂や境内を利用していることから実行性はあると考える。

---

[2] おやべ型１%まちづくり事業：個人市民税の１%に相当する額を財源として、「地域の活性化や特色あるまちづくりの推進を目的として、市民自らが考え、みんなで一緒に行動する事業」に対して補助金を交付する事業。

寺院の境内を週末限定で広場にすることはできないだろうか。例えばオープンカフェや子どもが遊べる広場としての空間。カフェの運営は、近隣の飲食店や菓子店が各自のメニュー等を持ち寄るなどして共同運営していけば、メニューや商品の紹介になり、新規顧客の獲得にも繋がる。

②空き店舗を活用した魅力の向上～若者・女性の輝く場～

空き店舗等を「インキュベータ施設」にリノベーションし、創業意欲のある若者や女性が出店する機会の創出を提案する。

市ではすでにインキュベータ施設を設け、創業者支援を行っているが、現在の施設は、街なかから 4～5 キロメートル離れた場所にあり、商業集積のある場所に立地しているとは言えない。また、インキュベータ利用者が市内で開業した実績が 0 件であることからも、街なかのインキュベータ施設で実績を上げることができれば、その自信が街なかでの出店に弾みがつき、空き店舗の解消にも繋がっていくと思われる。

また、市では若い経営者やこれから創業する若者・女性を育てる取り組みとして、平成 26 年度に「商業まちづくり塾」を開講し、受講生が販売する商品のブラッシュアップに取り組んだ。この商業まちづくり塾を一歩進んだ形で、経営に関する専門知識や事業計画書の作成方法も学べる講座とし、最終的に作成した事業計画書を商工会や金融機関などで構成される連携創業支援事業者の前で発表する。優秀な計画書を作成した受講生には、3 年間無償でインキュベータ施設を利用できる特典を付与する。

６．市民主体のまちづくりに繋ぐために

写真 3 街なかの空き店舗

まちづくりの担い手を育てていく必要があることを先に述べたが、その方策として市民向けのまちづくりワークショップの開催を提案する。地域の現状や課題について見つめ直し、街なかにある空き店舗等の利活用について提案する機会を設けることにより、まちづくりへの関心を高める効果が期待できる。

これまで、行政が市民から意見を聞く場として、タウンミーティングを開催してきているが、市民同士がまちづくりについて意見交換する場はなかったように思う。実在する空き店舗等の活用方法を話し合う中で、地域の現状についても理解を深め、まちづくりに対する意識の醸成を図り、今後のまちづくり活動へのきっかけに繋げていきたい。

ワークショップは行政職員や街なかの経営者も交え、できる限り多くの市民に参加してもらいたい。ワークショップから生まれた提案は、リノベーションスクールにおいて、実行性のある計画にまとめ、実際にリノベーションする際には、可能な限り地域の住民や市民の手で行い、地域にとって愛着のある場へと高めていく。

自分達の提案が実事業化することにより、まちづくりに関わっているという意識をさらに深め、将来的にリノベーションスクールやまちなか体験ツアーなどの運営にも関わっていくことを期待する。

まちづくりワークショップでの提案をリノベーションスクールでのテーマに組み込んでいく流れを作ることにより、市民主体のまちづくりへの広がりをもたせていく。

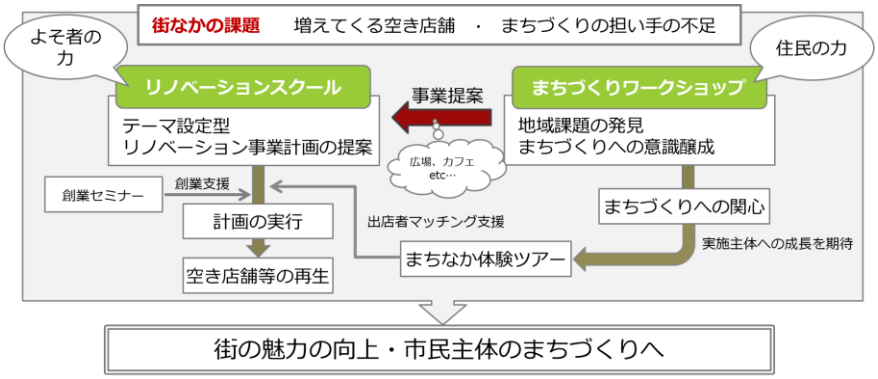

図 10 提案の全体図

７．おわりに

レポートを作成するにあたり、街なかの魅力を高め、立ち寄りたくなる場所にするにはどうすればよいかということを考え続けてきた。色々な提案を考えてみたが、行政の力ばかりでなく、街なかに関わる人々の「街を良くしたい」という強い思いや行動なくして「まちづくり」は成立しないことを強く感じた。

第6次小矢部市総合計画では、市民とのパートナーシップのまちづくりを基本として各種施策に取り組んでいるところであるが、市民自身が積極的にまちづくりに関わるようになるには道半ばであるように感じる。しかし、街なかには熱い思いを持った人は少数だが存在している。行政の役割は、その個々の人の思いを繋げるきっかけを作ることなのだと思う。

地名の「石動（いするぎ）」は、石ゆるぎのつづまった言葉であるという。能登石動山の神社の境内には動字石といわれる大石があり、異変がある時、この石が動くと伝えられている。人々の熱い思いが大きな力となって動き出したとき、初めて「まちづくり」も動き出すのだと思う。市民主体のまちづくりを「石動」という地域から発信していきたい。

（参考文献・資料）

○小矢部市『小矢部市史』（昭和 46 年発行、平成 14 年発行）
○総務省統計局（平成 7 年、平成 12 年、平成 17 年、平成 22 年）国勢調査結果
○小矢部市（2015）『市民満足度調査結果報告書』
○富山県商工会議所連合会ほか（1999）『商店街等通行量実態調査報告書』
○小矢部市（2015）『石動駅前商店街観光客受入態勢整備のための調査・検討報告書』
○小矢部市商工会（2014）『小矢部市商店街活性化策研究事業報告書』
○山下裕子（2013）『にぎわいの場富山グランドプラザ』学芸出版社
○北九州市ホームページ（リノベーションまちづくりの推進）
http://www.city.kitakyushu.lg.jp/
○国土交通省ホームページ（北九州リノベーションスクールを中核とする新しい地域再生実証調査事業（H23））http://www.mlit.go.jp/